

ヒガンバナ *Lycoris radiate* (L' Hér.) Herb. (ヒガンバナ科 Amaryllidaceae)

夏が過ぎ、彼岸を迎える頃、田のあぜ道を歩いていると、まるで真っ赤な炎が燃えているような花が目に入ります。これがヒガンバナです。東北～四国・九州を経て沖縄、さらに中国大陆・揚子江流域に多く分布します。本植物はもともと日本に自生はなく、縄文時代～弥生時代に中国大陆から持ち込まれたとする説が有力です。秋の彼岸の頃、高さ 20 ～ 40 cm の花茎を伸ばし、数個の花を散形花序に付け、花被片は細く縁が波うち、外側に反り返っているのが特徴で

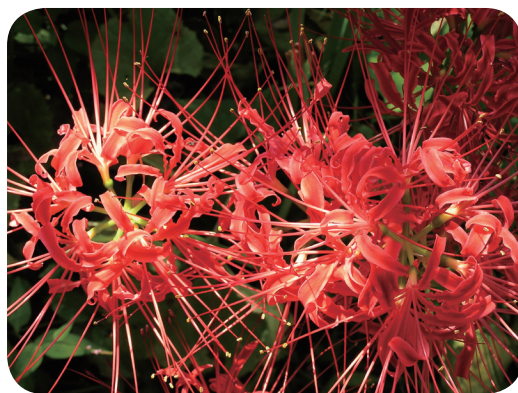


写真1 ヒガンバナ（花）

す。花が終わると濃緑色で中央が灰緑色の線形の葉を出します。救荒植物として古く大陸から持ち込まれたとする説、Lycorine などのアルカロイドを含む有毒植物なので、あぜ道に植えたり壁土に混ぜたりして、モグラやネズミの害を防いだとする説もあります。日本に分布するものは3倍体 (2n=33) で種子ができず、鱗茎の分裂によって繁殖しますが、中国大陆には2倍体 (2n=22) があり種子ができるそうです。

薬用としては、民間療法で鱗茎をすりつぶし、炎症・腫れ物に使用したたそうで

す。有毒成分を含みますが、水にさらせば良質のデンプンがとれ、これを飢饉のときの食糧にしたそうです。ヒガンバナの名前には、真っ赤な花が秋の彼岸の頃に咲きことから「彼岸花」、また、墓地に多く見られることなどから「死人花」、「曼珠沙華」「幽霊花」、「毒花」などともよばれます。同属植物にはキツネノカミソリ、シロバナノマンジュ



写真2 ヒガンバナ（花、遠景）



写真3 ヒガンバナ（鱗茎）



写真4 ヒガンバナ（葉）

シャゲ、ナツズイセンなどがあり、キツネノカミソリはヒガンバナに似ていますが、8月上旬、やや橙色の花が上向きに咲き、花被片の先はほとんど反り返りません。これらはいずれも、花が咲いているときに葉はありません。葉は他の植物との争いを避け、秋、花の終わった後から出始め、他の植物の葉が枯れている冬～春に茂って、光合成をして養分を蓄えます。その時、花はないため、「葉見ず花見ず」、「不義草」などとよばれます。

埼玉県日高市の巾着田には、500万本といわれるヒガンバナの大群生地があり、毎年9月下旬～10月上旬、「曼珠沙華祭り」が催され、まるで、一面が真っ赤な絨毯^{じゅうたん}を敷いたような光景を見ることができ、観光名所になっています。